躍進する！

関西の雄 名畑（なばた）グループ

第3回

「サントリー」から「名畑」へ

文・古野公喜（ジャーナリスト）

ナニワの外食産業界では知る人ぞ知る、業務用酒類食品卸業・株式会社「名畑」の名畑豊社長。大阪大学卒業後、サントリーに入社し、将来の家業継承へ向け、社会人生活をスタートした。

外食産業、回復傾向も

5月初め、3年以上も世の中を混乱させてきた新型コロナウイルス感染症が、感染症法上の2類から5類に位置づけが変更となった。外出の自粛要請は完全に撤廃。昼、夜の街も3年分の鬱憤（うっぷん）を晴らすかのように賑わいを取り戻してきたかに見える。欧米、アジア圏からインバウンドも4倍に激増した。大阪の街も、神戸、京都の繁華街も、地元客だけでなく国内からの観光客が増え、外食産業も回復傾向にある。ただ、名畑社長はまだまだ不満顔だ。

「街中の活気は戻ってきてはいるが、遅い時間の売上は戻っていない。また、大人数の宴会も少なく、コロナ以前の売上には戻っていないのが現状です」

外食産業を全面バックアップする「名畑」も着実に業績を回復しているが、市場としては「85％程度」。深夜営業をやめた店も多く「完全には戻らない」と予想。インバウンド需要も「元々、酒類を消費しない」としている。

ただ、指揮官は相変わらず忙しく走り回る毎日だ。元々、名畑社長は家業を継ぐつもりだったのか。

社長室でくつろぐ名畑社長

高校時代は軟式テニス部に所属しながら勉学に勤しみ、成績も優秀。担任教師から京都大学受験を勧められた。だが「絶対に浪人したくない」との思いで大阪大学経済学部を受験し、合格した。テニスやスキーのサークルで活動し、アルバイトは家庭教師。飲食店の店員などは未経験だった。ノンビリと過ごしたため時間を無駄にしたかと反省も。「あの頃に戻れるなら、海外留学してみたい」と謳歌した学生時代を振り返った。

阪大で「マーケティング論」専攻

経済学部経営学科で専門は「マーケティング論」。当時は文系の学部でコンピューターを使えるところは少なかった。まだ、そういう時代だった。受験前は「人間科学部に行って、コンピューターを勉強したかった」という考えもあったが「経営のゼミの勉強は面白かった。コンピューターを使うことができて、プログラミングの勉強もできた」と後々、大いに役に立ったそうだ。

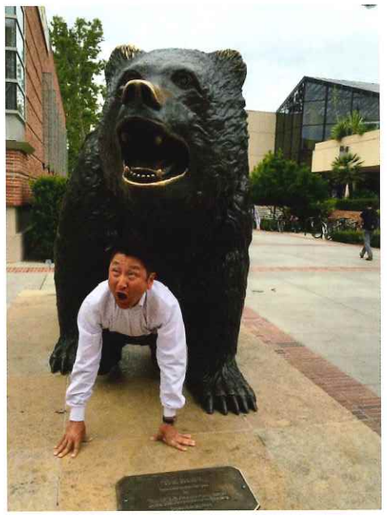
大学4年の就職活動は、人を喜ばせることが好きでお笑いの道も選択肢の1つとして考えられたが、現実味は乏しかったようで「マスコミに興味があった」。親友の1人は読売テレビに進んだ。自身は学生時代に出演した番組のこともあって朝日放送や、車が好きだったのでトヨタ自動車、他にもJTBなどを考えたが、実際には三和銀行、住友銀行、ニチメン、ネッスル、そしてサントリーを対象に就活を進めた。

最終的には、当時「名畑」の二代目社長だった父の、家業を継いでほしいという意向があり、直接「跡継ぎになれ」と言われたことはなかったが、周りを固められてサントリーを断りづらい状況になった。元々、1980年代の大学生新卒の就職戦線では、男女とも人気No.1企業だったサントリー。「家業を継ぐという条件がなくても、魅力はあった」という。

サントリーでは最初に商品の営業を担当した。酒販業者とメーカーとの間には昔から「預かり制度」というのがあり、3年半で家業に戻ることは決まっていての入社だった。だが、業務開発部という新たな外食文化を産み出す部署に興味を持ち、どうしても勉強がしたかったため、会社側に強く希望して2年間、在籍を延長。その部署に異動させてもらった。

4月に開かれた「食王（ショッキング）」にはサントリーも出店

「新店舗を立ち上げる部署。おもしろかった」。開店のための準備、例えばおしぼりやお箸はどうするか。注文から納品まで。その1つ1つで打ち合わせに時間がかかり過ぎだった。「1つ1つではなく、全部を任せる業者が当時はなかった。酒屋は酒だけという感じで」。後々、外食産業全般に手を広げ、酒類だけでなく冷凍食品や調理器具、家具まで自社で扱うように拡大していったのは、この部門での仕事や経験が大きなキッカケになったからだ。



社長になっても笑いをとるのが好き…

1990年、「名畑」へ

3年半の約束を2年延長。だが、前社長のたっての希望でサントリーを退社。1990年11月に「名畑」へ入社した。家業へ入社直後、名畑社長は「財務諸表さえないことに愕然とした」そうだ。経営理念がはっきりせず、会議も開かれない。組織として機能しておらず、一体感もない。会社の方向性も見えない〝その日暮らし〟で、いわば丼勘定的な経営。昔ながらの古い体質が残っていた。驚き、そして早急に建て直す必要性を感じた。そんな中、前社長から「コンピューターが機能していないので何とかしてほしい」と指令を受けた。

システム開発するために自ら全部署を数カ月間にわたって調査。全社員1人1人の日々の仕事に付きっきりで、現状を把握した。もちろん、古参社員の中には反発する者も。だが、コンピューター室の人間しか扱えなかったシステムを1年後に開発し、業務効率は劇的に改善された。〝お坊ちゃま〟な跡継ぎではなく、家業再建に真剣だった。その姿勢は認められ、ようやく全社員からの信頼を得られるようになった。2007年9月に社長に就任。赤字だった「名畑」が、関西の外食産業を引っ張る企業へと進み始めた。

4月の「食王」で幹部と作戦会議する名畑社長（中央）

Profile

名畑　豊　なばた・ゆたか

1962年12月20日、大阪府豊中市出身の60歳。豊中高、大阪大経済学部を経て1985年にサントリーに入社。1990年秋から家業に戻り専務。2007年に代表取締役社長に就任。趣味はゴルフ、音楽鑑賞。家族は妻、2女と孫3人。